



座談会 米ソをINFゼロに駆り立てたもの 週刊ダイヤモンド-1987.10.24

米ソを“INFゼロ”に駆り

INF廃絶原則合意をどう評価したらいいのか。甘い期待は禁物という見方がある一方 やはり歴史的な展開と位置づける向きは多い。いずれにせよ 米ソには「INFくらいはなくしたい」という衝動がある。それは何か。国際政治の専門家による議論。

遠くのSDIより近くのINF

渡辺 1年前のレイキャビク米ソ首脳会談で、ゴルバチョフはINF(中距離核戦力)、ICBM(戦略核兵器)、SDI(宇宙兵器)の3つをパッケージとして、別個に切り離して交渉しないという方針を打ち出した。特にSDIについて意見が合わず、INFが合意一步手前で流れたといういきさつがあったわけだが、今年にはいってゴルバチョフは急に態度を変え、INFはINFだけで話をつけようということになった。そして最近のシェワルナゼ外相とシュルツ国务長官の会談でINFをヨーロッパでもゼロ、アジアでもゼロにすることで原則合意が成った。なぜゴルバチョフが従来の態度を変えたのか、というところだが……。

佐瀬 表に出てきた動きをみて類推する限り、レイキャビク会談でソ連は一種の痙攣(けいれん)状態を起こすことによって、元来西側が提案していた“ゼロ・ゼロ・オプション”に駄目を押してみたのではないか。今年2月になってゴルバチョフは、そのパッケージを解いてみせた。ただ、おやおやと思ったのは、私なんかの予想を超えて、早め早めにそういう動きが出てきている。「これは譲らない」という論理を組み立てておきながら、数ヵ月後には思い切りよく取り下げてしまう。ゴルバチョフ政権になってからそういう動きが頻繁にみえる。

渡辺 SDIについては、モスクワが自ら手を下さなくても、アメリカの世論、議会、あるいはレーガン後に出てくるかもしれない民主党政権に任せておけば、殺せないまでも骨抜きになると判断したので

出席者(五十音順 敬称略)

佐瀬 昌盛 (防衛大学校教授)

中嶋 嶺雄 (東京外国語大学教授)

渡辺 昭夫 (東京大学教授)

はないか。ソ連にとっていちばん怖いのはやはりパーシングIIである、というのが素直な解釈かもしれない。佐瀬「遠くのSDIより近くのINF」と私はいっている。

中嶋 私も同じ意見だが、従来から米ソ関係というのは糸が切れていない。そこがおそらく50年代のいわゆる冷戦と、現在の冷戦との違いだと思う。レイキャビクでいっぺんあえて決裂してみせたのは、国内的な配慮があったのではないか。今回のINF交渉を厳しくみる人は、結局ソ連の平和攻勢にやられたという。後に残る通常兵力はむしろソ連のほうが強いのに、なぜこんなことをしたかと。だが、アメリカもソ連も国内経済が火の車になって、今までのように軍拡ができなくなっただけでなく、米ソの軍事的均衡そのものも全く違った方向にシフトしていかざるをえなくなっているとみる。その場合、SS20や、パーシングIIの配備・維持にどの程度のコストがかかるのだろう。もしINF交渉が成立したとすると、削減されるソ連の核弾頭はソ連の全軍事力の4%ぐらいといわれているが。

佐瀬 軍事合理性からいくと、ゼロにするのはいろんな問題が出てくる。東西ドイツ、および西ドイツ



▲渡辺昭夫教授

立てたもの



—— パーシングII(米・NATO) SS-20(ソ連) ——
 (注)種東・北太平洋のパーシングIIはアラスカに配備した場合の射程

とチェコの国境をはさんで、いままで非常に高い核軍備を持ちながらある種の安定を保ってきた。軍事的にいうとパーシングIIを20発でもいいから残しておいたほうがいい。要するに4%減らしても1%にとどめても、核兵器の総数からいったらほとんど変わらないが、その戦略的意味はガラッと違ってくる。ではこれがきっかけになって、米ソがこれまでと違う核軍備の体制へ移行するかというと、そうは思えない。レーガンがここまでまとめた、ということで交渉のモメンタム(はずみ)はむしろ一頓挫するとみる。

なぜ かくもあっさり“2枚舌”を改めたか

渡辺 INF交渉の大きな障害のひとつは、ソ連がアジアにSS20を100基残すことにこだわっていたことだ。しかしゴルバチョフは7月22日、インドネシアの『ムルデカ』という新聞とのインタビューで、アメリカがアラスカに中距離核ミサイルを配備する

“権利”を放棄するなら、ソ連側もシベリア配備のSS20にはこだわらないといった。この取引がアジア・太平洋の戦略環境にどういう意味を持つのか、あまり議論されていない。中国はどのような反応を示していますか。

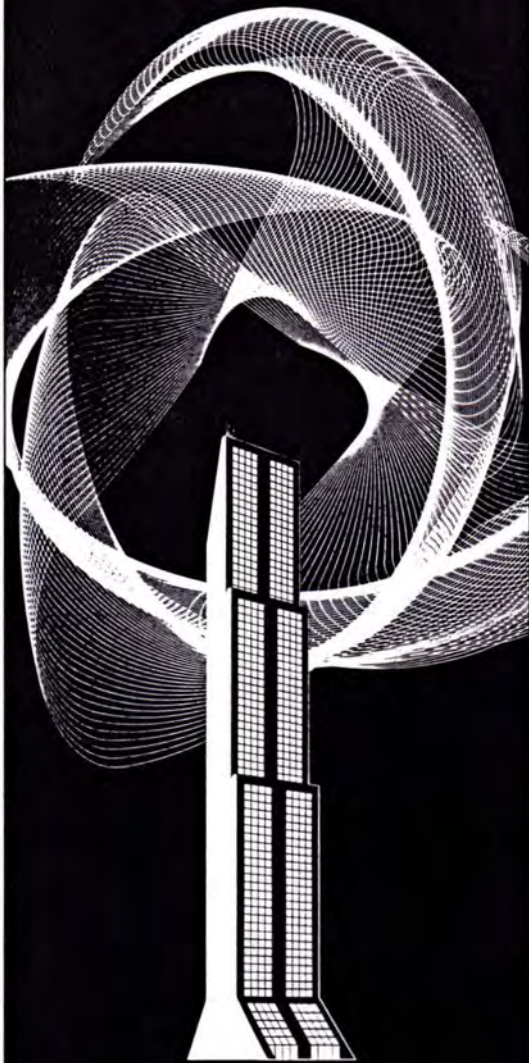
中嶋 中国はそもそもSS20についても、このところほとんど非難らしい非難をしていない。すでに中国はソ連の軍事的脅威をほとんど感じなくなっている。現在の中国首脳部の基本的な対ソ認識からすれば、SS20のシベリア配備はそんなに深刻な問題ではない。もうひとつのポイントはゴルバチョフのウラジオストク演説との関係だ。それはソ連自身も中ソ関係や日ソ関係の改善を含めて、従来のブレジネフ時代の単に軍事力だけで膨張していこうという戦略から店じまいをして、本気で新しいアジア・太平洋戦略を打ち出していこうという意味があった。そういう見方からすると、中曽根さんがベネチア・サミットで、アメリカはアラスカに中距離核を100発置いていい、というような発言をしたことは、中曽根さんないしは中曽根さんのな日米関係なり対ソ関係の認識自体が、現在の米ソ関係のなかでヨーロッパと同じように、ある種の置いてきぼりを食ったのじゃないか。

渡辺 ヨーロッパの場合には、片方にパーシングII、片方にSS20があって等式の関係になっているから話はわかりやすいが、アジア・太平洋地域では、片方にシベリアのSS20があるだけで、それに対応するものが何なのかわかりにくかった。

佐瀬 私は今年の5月にソ連に行って議論したときも、それを「ゴルバチョフのダブル・スタンダード(2枚舌)だ」といった。アジアに100発残すのは韓国に配備されている核、沖縄の核——私は沖縄にはないといっているが——フィリピン、第7艦隊の核があるからというのがゴルバチョフの言い方だ。しかしこれらはINFじゃない。このおかしき、つまりゴルバチョフの2枚舌を解消させるためには“INF対INF”にしないといけない。そのためにありうる可能性は、アメリカがそうするかどうかは別だが、アラスカ配備である。だから私は中嶋さんの意見とは全然違うけれども、中曽根さんのベネチア・サミット発言は論理的に正しい。これではじめてINF対INFという両天びんの関係ができた。ある意味で日本は漁夫の利を得てしまった。手を汚さず、アラスカ配備権をちらつかせるだけでSS20をゼロにしたのだから、日本としてはできすぎだと、

24時間のスマートオフィス 未来の風の中で…

ビルをインテリジェント化する
近電エータルファシリティシステム



エネルギー・情報・環境・設備総合エンジニアリング

近電工

近畿電気工業株式会社

大阪市大淀区本庄東2丁目3番41号 千531006-375-6000

そのときいった。

渡辺 ダブル・スタンダードをソ連が解消したことがはっきりしていれば、問題ははっきりする。

中嶋 従来ソ連は「2枚舌」といわれたくらいでは、なかなか改めなかった。それが今回はあっさり「グローバル・ゼロ」（世界中でINF廃絶）に切り替える。

そのカギをどのように考えますか。

佐瀬 これはまとめたかった、ということ、つまりどうしてもカギを作りたかった、条約でも協定でもまとめたかったということでしょう。まとめるためには、アジアだけ100発残すことについてアメリカ側からまた異論が出ることを避けたかったし、その異論再発のあげく、現にアラスカに配備されるかもしれないということを事前に封殺したかった。ただ中嶋さんにひとついっておかないといけないのは、こういうときには一方的な善意とか、一方的なものわりのよさというのは働かない。ぎりぎりの辛い辛い計算をやったうえで結実するものだから、ウラジオストク演説の精神をくんでみるとこうなるんじゃないかという論に、私は乗れない。



▲佐瀬昌盛教授

初めての「グローバル・ゼロ」合意

中嶋 僕は善意なんていう言葉は使ってないし、ゴルバチョフが平和の使徒だと手放していつているわけではない。しかしいまのソ連は、従来のような軍拡ができにくくなっている状況にあるし、同時にそれを維持するコストが非常に大きくなっているのも事実だろう。それから、従来ソ連は石油によって同盟国を支配してきたが、それもできにくくなってきた。同時にブレジネフ時代にアフガニスタンだ、アフリカだとあちこちに出て行ったにもかかわらず、必ずしもその世界戦略が成功しているとはいえない。そういうさまざまな教訓を得たうえで登場してきたのがゴルバチョフであって、その点ではかなり大胆な政策転換をやりうる指導者だといっている。

軍拡一辺倒だった米ソがこういう大きな軍縮に転換することは初めてだと思う。肝心の戦略核は残る

じゃないか、といわれれば確かにそうだが、にもかかわらず、三角形の頂点をとにかく削ろうということになった。それがたとえ数パーセントであっても、だんだん底辺部分にまで拡大するきっかけになりうるのではないか。そういう大きな歴史的転換というものは、テクニカルな軍事専門家だけにしかわからないような交渉とか駆引きを超えたところで起こっているのではないか。計算ずくで考えると確かににもアメリカはここで受け入れる必要はない。アメリカの一部にも、拙速だ、むしろこれからSDIにつなげていって、西側の結束を強めて追い詰めていけばいいという議論はある。にもかかわらず、ここでヨーロッパや日本の頭越しに、米ソが妥協せざるをえないところに、現在の国際政治、あるいは米ソ関係の根本的な潮流がある。

渡辺 いままでの軍備交渉は軍備増強のシーリングをどこに置くかということが問題だったが、今度は文字どおりの軍縮であり、現に持っているものを仮に4%でも、とにかく減らすと、これは初めてのこととあっていい。そういうことが行なわれるためには、それなりの最高レベルでの決断がなければならない。その意味でいま中嶋さんがおっしゃったように、軍縮戦略というよりは、より大きな世界的戦略、政治的戦略が当然背後にあるのだろう。それがINFだけでなく、もっとほかの分野にも広がって、「新デタント」といいような新しい方向に、時代が動きつつあるとまで考えていいものかどうか。

佐瀬 誤解のないようにいっておきたいのだが、協定によって相互の核軍備が削減されるのは歴史上初めてとあっていいが、これまでも核兵器は減っているのだ。NATOは慈善行為ではなく、合理的思考の結果、こんなに核に置いておくのはかえってよくないということになり、核の内容を変え、1982年ごろから弾頭数でいうと3000発ぐらい減らした。今度は最高限度減らして2000発だから、それより多いものが交渉によらずに廃棄されてきた。

そういう事実も踏まえて、私は「これで黒かった世界が白くなる」というように考えるのは反対だ。いままでは真っ黒に描きすぎたきらいはあった。それが少しは明るい灰色になる。それは否定しない。しかしこれ

が突破口になって、いままでと違った雰囲気が出てくるという考え方には同調できない。

アメリカは両超大国が第三世界においても、行動を自己抑制することをデタントの精神だと考えていたが、それはアメリカの一方的な期待感だった。ソ連もそういう行動を取ってくれるだろうと思ったなら、そうじゃなくて、アメリカとの間のデタントの協定は守るが、民族解放戦線を支援するのは共産主義者の義務だというような、デタント観の食い違いがあった。ソ連のほうが実態に即して、アメリカのほうがデタントの拡大解釈をしていた。

「軍縮は店じまいして経済に専念したい」

渡辺 私も「新しいデタントが到来した」というような言い方は誤解を受けるからしたくないが、しかし米ソ間の対決と対話の局面において、それぞれ違う事情ではあるけれども、なんとかか話をつけて、少し息抜きをしたいという事情は両方にある。特にアメリカの側についてそういうことがいえるわけで、かつてアメリカがデタントを拡大解釈したのも、それなりの理由があったからだろう。そういう気持は今もあって、例えばレーガンがこの間国連でやった演説などは、実に歯の浮くような言葉で米ソ関係の改善について語った。いまや平和の時代に移りつつある。諸国が協力するためには外側の敵が必要だ。外側の敵とは、戦争と戦争の脅威である。その脅威に対してアメリカとソ連は協力して当たっていくという調子だ。

それは、アメリカ側の、あるムードを表わしてい



TDK GALLERY

フェライトマグネットに比べ、ケタ違いに強い磁力をもつハイテク磁石として注目される希土類コバルト磁石。ヘッドホンや腕時計などで活躍中です。

TDK

る。アメリカは、一方では経済で日本に追い上げられているという感じがあり、他方ではソ連とつばぜり合いをやっている。この両方でエネルギーを使っていたのではどうにもならない。だから、戦線を整理したい。もうちょっと経済のほうにまともに取り組むためには、ソ連との関係をなんとか収めておきたいという気持がかなりあると思う。

だからINFがすんだら戦略兵器も50%まで削りましょう、SDIも止めましょうと、そこまでいくとはとても思えないけれども、とにかくINFくらいはまとめようという姿勢は、そういうアメリカ側の気持を表わしている。ソ連側にも同じような事情があって、米ソ間の直接対話の機会を増やしていこうという動きにつながっているのだと思う。

中嶋 いまいみじくも渡辺さんがいわれたとおり、アメリカの側にも店じまいをしたい衝動がある。さっきいったように、ソ連自身も店じまいせざるをえない。だからお互いに弱みを見つめながら、相互依存をせざるをえないような大勢にいまの米ソ関係はあるのではないか。もっと大状況的にみると20世紀は革命と戦争の世紀といわれ、その革命と戦争によって、ソ連とアメリカが世界の覇者になった。しかし21世紀をアメリカとソ連の世紀という風には考えにくい。

さっきの黒・白の話ではないが、だからといって、アメリカが大崩壊するなんていうつもりはないけれども、どうもガタがきている。ココム事件でアメリカがあれば日本をたたくというのはそのひとつの表われだと思し、同じようにゴルバチョフが必死になってなにかをやらなければいけないのは、ソ連も先がみえてきている証拠ではないか。

その観点からすると、佐瀬さんと見方は違うかもしれないが、今回のINFの原則合意は非常に画期的な、いわば歴史的な意味をもつのではないか。これをきっかけに考えてみると、お互いにある意味で非常にばからしいことをやっていたということに気づくんじゃないか。このままいくと21世紀は東アジアの世紀になると思う。世界のGNPの20%くらいを占めるようになると予想されるから、いまのアメリカの地位にほぼ相当する。日本も韓国も台湾も自らは軽武装だが、アメリカの庇護のもとでうまいこと経済発展ができた。そこにアメリカのいらだちもあるし、軍備競争はもう店じまいしたいという衝動がある。時代は軍事大国から経済のほうへ移ってきている。



▲中嶋嶺雄教授

デタントを超える体制とは……

佐瀬 私は別にデタントの敵じゃなくて、条件付きのデタント必要論者だが、いまお2人がいわれたような展望を描くことはできない。デタントと云って最盛期は5～6年であって、12年以上先の21世紀に向かってデ

タントの時代になるというようなことはいえない。まず「ニューデタント」なんていっているのは日本のマスコミだけだ。ヨーロッパなんかむしろらい時代がきた、いままでより悪いとみている。ソ連についていうと、ブレジネフとゴルバチョフのポキャブラリーにおける違いは何かというと、ゴルバチョフは「デタント」という言葉を使わなくなったことだ。2年前の党大会の演説で2ヵ所だけ、しかもそれ自体全く意味をもたない使い方をしている。今度「イズベスチヤ」に出した論文では、1ヵ所、「デタントが失われた」という意味で使っている。ブレジネフがやたら「デタント」という言葉を使ったのと対照的である。

中嶋 確かに「デタント」というのは手あかがついた言葉で、それをいわないところにまさにゴルバチョフの新しさがあるのだと思う。デタント以上の世界戦略、というか米ソ関係を構築しようというのがゴルバチョフじゃないか。

佐瀬「包括的国際平和安全保障体制を組む」というのがゴルバチョフのキャッチフレーズだが、それは時代を先取りしているというより、かなりの程度美辞麗句だ。非常に辛いアメリカとの関係で出てきているのは「均衡」という言葉です。均衡ということに、ゴルバチョフは異常といえるまでの執念を燃やしている。

いったん、アメリカとの間に対等の関係を築いたものは、経済が苦しくとも、交渉によって対等性を低いレベルでのものにしていこうという姿勢はとるだろうが、軍事的超大国としての綱を締めた国がその地位から撤退することは、この15年とか20年とかいう期間では到底考えられない。非常な苦しみを伴いながら、超大国としての地位の維持に全力をあげ

るだろう。

米ソは相対的な地位が低下していることに気づきながら、「わかっちゃいるがやめられない」という事情が実はありうる。軽武装国家になるならば、繁栄の道が開かれるとって方向転換できるほど理性的に国際政治は運営されていない。

東アジアに光が当たっている

渡辺 ある種のことが変わりつつあるということまではいえると思うのだが、ではどういう時代にはいるろうとしているのかを的確に表わす言葉が、正直いってない。両方がとにかく行くところまで行ったという感じは米ソともにあるだろう。両方とも気に食わないけど、相手をまっ殺したり、相手がどこかへ行ってしまふことにはならない。

とにかく鼻を突き合わせてでも生きていかなければならないという認識はできてきた。少なくとも自分たちがジレンマに陥っているという感じは共有している。

そこで日本の立場がどうなるかだが、アメリカはソ連の追上げを埋めるために、日本や西ヨーロッパになにかしてくれと頼む発想はそろそろ限界にきたと思いは始めている。一本調子ではなくなってきているということを、日本としては計算に入れておいたほうがいい。

中嶋 同じように米中関係にも限界が出てきつつある。とすると今度はアメリカ自身がアメリカ的な対ソ融和になだれ込む可能性がなきにしもあらずで、それが日本などに逆の風あたりになって出てきはしないかという懸念はある。

佐瀬 冷戦でもない、相手を悪罵(ば)するのでもない、かといってなんでもホイホイやりましょうというのでもない、「つらい取引の時代」がやってくるような気がする。一方、長い目でみると確かにアジア・太平洋地域のポテンシャルは大きい。台湾、韓国など政治的安定ということでは大変な問題を含んでいるが、それを除けば、他の地域の羨(せん)望と怨嗟(えんさ)の的といってもいいくらいの経済的活力をこの地域は持っている。

中嶋 そうです。だからこそソ連からもアメリカからも狙われている。皮肉なことに、ソ連も、台湾とか韓国とか自分のフィールドでないところがこんなに光っていることに、ようやく気がつき始めたのでしよう。

断固として
「毛根にエネルギー」
ペンタデカン
だけであります。



ライオンの育毛剤薬用

ペンタデカン

ライオン株式会社

200
万本
浸透
中